

都市の履歴を活かしたまちづくり

社会環境工学科 田中尚人

1. はじめに

景観法時代を迎え、今まで以上に都市の個性、地域の風土の重要性が指摘されている。都市部においては、中心市街地の活性化や安心・安全な生活環境づくりなど、複雑かつ重層化した課題が数多い。当研究室では「まちなか工房」を拠点として、景観デザインや土木史の知見から、これらの都市問題を解決し、地域の風土に根ざしたコミュニティベースのまちづくりを実践したいと考える。

本研究では、まちなかの街路空間や坪井川などの都市形成に寄与してきたインフラストラクチャーに対して、地域住民が育んできたソーシャルキャピタル的な知見を「都市の履歴」として、まちづくりに活用していくことを目的とする。

具体的には、坪井川流域の壺川地区において防災まちづくり、古町・新町地区において景観まちづくりの提案を行った。



写真-1 坪井川古流路



写真-2 ピロティ建築



写真-3 まち歩きの様子

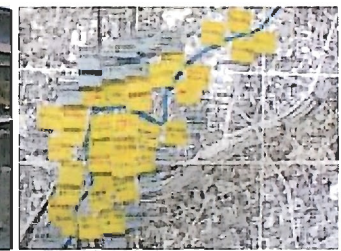


写真-4 履歴を共有

住んでいる場所の広域な環境との関係性を把握できるように、町内より広域である「壺川校区版」の防災マップを作成した。これらを元に、地域の履歴を活かした防災マップを作成し、リスクコミュニケーションのツールとした。

(2) 古町・新町地区における景観まちづくり

当該地区は、坪井川沿川の中でも明八橋や明十橋など歴史的な土木構造物が存在し、沿川の街並みが古く、地下室が坪井川舟運の名残を感じさせる地区である。ここで、地域住民と一緒にまち歩き(写真-3)を重ね、土地の履歴、まちの記憶、ひとの経験を、地図に集約し(写真-4)地域住民とともに共有した。

景観まちづくりは、単に構造物や街並みを整備するのみならず、地域の人々の生活に根ざした持続可能な景観づくりを指し、この共有された地域の履歴は、今後も継続的に更新されるものである。

4. おわりに

いずれの取り組みにおいても、地域の履歴を地図として共有し、かたちあるビジョンを描くことで、シームレスな地域のかたちが浮かび上がり、重要な議論ができた。例えば、防災マップに歴史を取り入れる意義は、「日常と非日常」、「過去と現在」、「個人と地域」などの二つの要素を結びつけ、擦り合わせることである。歴史は地域固有であり、地域アイデンティティの確立にも役立つことが分かった。

2. 地域の履歴を活かす

防災のみならず地域にとって、過去の経験を未来に活かすことは重要である。地域に古くから住んできた人々の経験やそこから生まれた生活の知恵や工夫、人々の営みの積み重ねも含め、地域の履歴として認識することで、過去と現在をより強く結び付けることができる。

本研究で扱う「歴史」は人を介して得られる地域の情報であり、地域固有の風土に根ざした環境から読み取ることができる。本研究では、地域の履歴を次の3分類とした。

- a) 土地の履歴：地盤高や河川流路(写真-1)など地形や気候、その土地が持つ固有な自然環境をいう。
- b) まちの記憶：土地の上に人々が築いてきた土木構造物、家屋(写真-2)や屋敷林、人為的環境をいう。
- c) ひとの経験：その土地に暮らしてきた人々の活動の証。知恵や技、創意工夫の結果をいう。

3. まちづくり提案

(1) 壺川地区における防災まちづくり

当該地区における防災まちづくりのためのまち歩きの対象として、自主防災組織が存在し協力を得ることのできた壺川校区10町内、15町内を選定した。2ヶ所の防災マップを作成する前に、地域住民が自分たちの